



<http://www.afs.or.jp/>

AFS NEWS

2004 Winter
エイ・エフ・エス ニュース

NO.117

発行人
財団法人エイ・エフ・エス日本協会
事務局長 大山 守雄
編集長 河野 淳子
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-16 2F
☎03-3357-5831 ☎03-3357-5841
✉ info@afs.or.jp

New Year Message

50周年を節目に、新たなるスタートを

理事長 垂水 公正

活躍するAFSリターナー

NPOマネジメントの5原則

日本ユニセフ協会専務理事付特別アドバイザー スカリオン・承子さん(1964-65/YP11期)

特別寄稿 幸せに暮らせる世界に...

TBS (株)東京放送 アナウンサー 秋沢 淳子さん(1985-86/YP32期)

AFS海外パートナー

20周年を迎えたAFS香港より

50周年事業

恩返しから始まったAFS日本協会

50周年記念事業実行委員会からのお知らせ

AFSボランティア

クローズアップボランティア活動

ボランティア・エクスチェンジ報告(タイ 日本)



AFS日本協会は今年50周年を迎えます。
10月10日(日)記念式典・イベント開催!

50周年を節目に、新たなるスタートを

理事長 たるみず きみまさ 垂水 公正

2004年の幕開けにあたり、皆さまの一層のご多幸をお祈り申し上げます。
昨年11月に、事務局長が交代いたしました。約6年間、AFS活動をリードしてきた新谷勝利氏に代わり、大山 守雄氏が新しい事務局長に選任されました。
新谷氏は、AFS国内組織がかかえる様々な問題を明解に分析しながら、業務改善点を鋭く指摘し、IT化を導入するなど積極的な活動を行いました。また、AFS国際組織のなかでも中心的な役割を果たし、日本協会の地位向上に大きく貢献しました。在職中の数々のご功績に心から敬意と謝意を表します。
大山氏は、中日本のAFS活動を長年にわたりリードしてきましたが、数年前より日本協会本部の副局長を兼任し、新谷氏をサポートしながら事務局運営に携わってきました。今後も、これまでの改革の流れを踏襲しながら、AFS日本協会の発展に寄与して下さるものと期待しています。
新しい年は、AFSの日本での活動が50周年を迎えるという節目の年にあたります。この50年間、AFS活動を支えてくださった多くの関係者の皆さまに心からお礼を申し上げるとともに、皆さまともう一度原点に立ち戻り、AFSミッション実現に向け、気持ちを新たにしたいと考えております。
本年もどうぞよろしくご協力、ご支援をくださいますようお願い申し上げます。



ごあいさつ

事務局長 おおやま もりお 大山 守雄



米国コロラド州でのAFS留学から帰国して半年後、一宿一飯の恩義を感じてAFSのボランティア活動に身を投じたのは35年前のことでした。どいつかれた「AFS病」は年とともに重くなり、このたびついに教職からも離れ、新谷先輩からバトンを受け継ぐことになりました。
大学院時代劣等生だった私が、緒方 貞子先生のゼミで一つだけ覚えているのは、国際平和を達成するために民間交流が果たす役割でした。今回その一翼を担うことができるというのは、身に余る光栄です。
たとえ命令を受けても、私は自分が留学した米国はもちろん、娘の留学したドイツには銃を向けることはできません。帰国前に一緒にバス旅行をした40人のAFS生の出身国に対しても同じような気持ちを持っています。ホストファミリーの皆さんも同じお気持ちでしょう。テレビで我が家に入れた生徒たちの国のことが映れば、目を凝らしてブラウン管を見つめてしまいます。こうした人と人とのつながりが世界中に広がれば、銃を向ける先はなくなります。9・11後、AFS米国はイスラム圏からの受入れに積極的に取り組んでいます。日本も世界の孤児にならないよう、民間交流のパイプを太くしていく必要があります。

これまでにAFSが輩出した人材は、外交畑はもちろん、政界、財界、教育界、医学界、マスコミなど、この50年間に各界で目を見張るような活躍をしています。日本にやってきた留学生もそれぞれの祖国、あるいは国際舞台で大活躍しています。異文化体験がいかに多くの若者を成長させたことでしょうか。何度もホストファミリーをされる方の妙味は「世界中の自分たちの子供」の活躍を楽しめることだと聞いたことがあります。留学生、ホストファミリー、ホストスクールにこのようなチャンスを提供してきたトップブランド「AFS」も、最近は陰りが見えるとの指摘を受けることがあります。50周年を迎えるにあたり、もう一度我々の活動の原点を確認し、全国のボランティアの皆さまのお力添えを得て、次の中継地点まで周りの風景を楽しみながら、楽しく疾走できることを祈りつつ、ごあいさついたします。

新谷 勝利前AFS日本協会事務局長に対して、国際本部より感謝状が贈られました。お疲れさまでした。今後のご活躍をお祈りいたします。



昨年10月20日、AFS日本協会事務局にて国際本部職員のハイロ・リベロス氏より感謝状を受け取った新谷氏

AAI (AFS Asia Initiative)

マレーシアでボランティア研修

昨年8月、マレーシアの首都クアラルンプールで、AAI^注のボランティア研修が開かれました。マレーシア8支部の支部長と職員、タイのボランティア3名と職員、日本からは船田 千絵(栃木支部長) と堀越 悦子(茨城支部長) の2名が参加して、4日間にわたって行われました。

研修プログラムの内容はどれも実践的で、大変参考になりました。また、他の国のボランティアや職員との素晴らしい出会いにも恵まれ、感動しました。話題が受入生や支部活動のことに及ぶと、互いの共通項を多く発見し、「世界中どこに行ってもAFSは皆同じ」という思いが強くなりました。多様な人々、言語が行き交う多民族国家マレーシアでの研修

で、私たちは今後のAFS活動に必要な多くのことを学びました。過去にマレーシアから栃木、茨城支部に来ていた留学生たちとの再会も実現し、彼女たちの成長ぶりを目の当たりにできたことも、大きな収穫でした。

船田 千絵(栃木支部長)、堀越 悦子(茨城支部長)



ボランティア研修の参加者たち。2列目右から1番目が堀越氏、4番目が船田氏

主な研修プログラム	概要
「異文化理解能力」に関するレクチャー	マルチカルチャーをどう受け入れ、複雑さを理解するか。カルチャーを伴う「個人」とどう向き合うか
プロジェクト・マネジメント	紙、ハサミ、テープを使って20分間で「橋作り」にトライ。失敗を通してプロジェクトの計画、実行、評価のサイクルを学ぶ
コミュニケーション・スキル	他人からどのように見えるかを意識した話し方、body language の重要性など
AFSタイの報告	教師派遣プログラムを土台とし、学校との緊密な連携の下に事業を展開するAFSタイの実例に学ぶ
ボランティア研修をとおしての成長	成長とは何か。成長を測る基準は何か。個人・組織の双方にとって必要な研修とは何か

(注) AFS Asia Initiativeの略。アジアのAFSパートナーが地域内の交流・組織強化の目的で10年前に発足

AFS海外パートナー

20周年を迎えたAFS香港より

> AFS香港事務局長 タラ・ホフマン

昨年11月8日に行われたAFS香港の20周年記念式典のテーマは、「ともに成長しよう!」でした。式典に先立って行われた2日間のセミナーには、日本を含む世界8パートナーのボランティアとAFS香港のボランティア約200名が参加し、AFS香港やAFSの将来について大変有意義な意見交換を行いました。AFS国際本部からは理事の高田 祐三氏も来てくださいました。AFS香港の組織は、ここ数年でめざましく成長しました。プログラム参加者数が2000年度実績から22%も増加し、20周年を迎えた今年、過去最高の140名もの年間派遣生を世界に送り出すことができました。また、品質、プログラム数、ボランティア強化などの面でも成長し、現在は年間プログラムを軸として、コミュニティー・サービス、クラス・エクスチェンジ、ボランティア・エクスチェンジ、語学研修など、多彩なプログラムを提

供しています。

ボランティア開発は、AFS香港の最優先課題でした。支部を基盤とした組織から、機能優先のチーム組織へと構造転換をはかり(香港のように狭い地域では、支部組織は必ずしも必要ではありません)現在は240名以上のボランティアがAFS香港の機能チームに所属し、活動しています。



この式典は、ボランティアにとってAFSの意義を考え、社会における役割を認識するとてもよい機会になりました。

「成長」は私たちが存続する上でとても重要です。そして、その鍵を握るのはボランティアなのです。

AFS香港20周年式典の会場で。写真左より、国際本部理事の高田氏、50周年事務局の小松崎氏、ホフマン氏、50周年イベント担当の濱崎氏

NPOマネジメントの5原則

> 日本ユニセフ協会専務理事付特別アドバイザー

スカリオン・承子さん(1964-65 / YP11期)



スカリオン・承子さん(10月14日、AFS事務局にて)

引

つ越して間もないAFS新事務所で開催された今回の集いは、50周年を迎えるAFS日本協会にとってタイムリーなテーマであった。過去を検証し、さらなる50年に向けてどのように継続発展させていったらよいかを考えるよい機会だからだ。

ゲストスピーカーは、大学院以来NPOマネジメントに一貫して携わってきたスカリオン・承子さん。実績に裏打ちされた豊富な経験をもとに語られる内容は説得力がある。地に足のついたNPO組織をつくるためにはどうしたらよいか。スカリオンさんは5つの重要な要素をあげている。

5原則とは

まず第1にビジョンとミッション。単にやりたいからやるというのではなく、誰が何を必要としているから、何をやる、ということをきちんと文書化する。短期的にすぐできるようなことはミッションにしない。たとえば米国の鉄道産業が荒廃の道を歩んだのはミッションステートメントが単に鉄道を走らせることだったのが一因という反省がある。第2に戦略。ミッションを達成するために、3年後をめやすに数値目標をたてる。人材、資金、手段をはっきりうちだして、どこに何を投資してどういう仕事をしなければならぬかを示す。

第3に組織基盤としてのインフラ。戦略が地図だとするとインフラはそれに見合う道路と車である。財務管理、MIS(管理情報システム)、人事、法律の問題などだ。基盤づくりは地道にコツコツとやらなければならないことが多い。

第4に創造性と実行力。スタッフやボランティアの最大限の創造力を活用する。信頼できる人を雇ったら、明確に方針を説明して後は任せる。実行して結果を出してもらおう。実績があがった時は、必ず評価する。

第5に説明責任と信頼性。一人ひとりの責任の所在をはっきりさせておく。外部の人にオープンに説明できる状態にする。

people developmentへ

以上の5項目が満たされて初めて募金集めを始めることができる。従来のfundraisingというアプローチからfunddevelopmentへ移行する必要がある。募金は究極的には人と人の関係で集まってくる

るものなので、その関係を培って長期にわたる支援者を育てていくことが大切。募金とは、支援者が組織を信頼して預けてくれたお金であるから一銭たりとも無駄にしてはならない。この潔癖性は信頼性につながり、本当に大事なことであればスカリオンさんは強調する。

今後のNPOの課題

民主主義は、社会を安定させるための完璧なシステムではなく、必ずどこかにゆがみがでてくる。政府、企業、NGOなど3者が協力してあたらなければならない問題がどんどん増えてきている。日本におけるその最初の兆候が阪神大震災だった。

今後ますます大きくなっていくNPOの役割を考えるうえで、最終的にはウinston・チャーチルの次の言葉が示唆に富んでいるとスカリオンさんはいう。

「文明の民度を計るためには、その社会が弱者にいかに対応してきたかを計ればよい」

講演後の質疑応答では、AFS日本協会の活性化に関して、基盤整備の重要性、ブランド価値をどうやって守るか、評価の数値化の難しさなど活発な議論が交わされた。

10月14日、「AFS友の会」ネットワーキングの集いより
文/鈴木 百合子(YP11期)

PROFILE

スカリオン・承子(つぎこ)

米オハイオ州Baldwin-Wallace College卒業後、バーモント州のSchool for International Trainingで国際経営管理学修士号取得。72-87年、ニューヨークのAFS国際本部勤務。その後、米国ユニセフ協会の専務理事を経て、ロックフェラー一族の財団 The Synergos Institute で開発途上国の貧困軽減問題に取り組む。97年12月より日本に在住。現在は日本ユニセフ協会専務理事付特別アドバイザーとして活躍。この3月まではAFS日本協会の財務委員長を務めた。

幸せに暮らせる世界に・・・ 秋沢 淳子

ニュージーランドで過ごしたAFSの1年は、もしかすると私の人生で一番光り輝いていた時間かもしれません。あれから18年が過ぎました。まさに、Time Flies! 早い早い・・・。帰国後大学に進学し、1991年4月からTBS(株)東京放送)でアナウンサーの仕事をしています。スポーツからエンターテインメント、政治、経済、国際問題にいたるまで、いつも実に様々な情報に接しています。知らないことの多さに驚愕しながら、「毎日が勉強」という日々。現在は毎週月曜から金曜日、午前2時起きで早朝のニュース番組を担当しています。冬場は番組が終わっても外がまだ暗い(泣)というシビレル勤務。世間の皆さままたは8時間くらい生活時間がずれているので、楽しいディナーのお誘いなども当然ナシ・・・。

今では人気の「アナウンサー」という仕事、実はものすごく「体力勝負」です。しかも、いつも頭をスックリさせておかなばなりません。とはいえ、この仕事は自分にとって天職だと思っています。アナウンサーに必要な国際情勢への関心の高さ、底抜けな明るさ、困難に負けない粘り強さ、社交性、違いを受入れる感性・・・。これらはすべてAFSで培ったもので、今の私を支えています。

思えば18年前、未知の世界への冒険は、成田空港で19人の仲間とともにこんなふうにはじめました。まず、温かくも無慈悲(?)に放り出してくださった日本協会の方のひとこと。「現地でボランティアの人が迎えに来てくれるはずだから、よろしくね。いってらっしゃ～い」

私たちは、「本当に誰か来てるの? 現地に着いたらどうすればいいの??」と希望と不安を抱えて飛行機に乗り込みました。今となっては懐かしいですね。

ところで、田舎育ちの私は「留学でピカピカの都会生活」に憧れていたのですが、ニュージーランドでのステイ先は、日本の我家よりはるかに田舎でした(笑)。

AFS体験は一言でいうと「それはそれは素晴らしいもの」。とても言葉だけで言い尽くせないキラキラした思い出でいっ



エシヤンタ氏(左)とSPUTNIKの皆さん

ぱいです。そんななかでも、一番の宝物は現地で出会った人々でしょう。

実は2000年12月、国際交流ボランティア団体SPUTNIKを立ち上げました。活動のパートナーは、ニュージーランドで出会ったスリランカからのAFS生で、エシヤンタ・アーリアダーサ氏です。ふたりで国際交流会館、オーディトリウム、併設図書館をスリランカに設立し、子供たちに外国語やスポーツ、異文化体験をしてもらっています。現地では、大学生を中心とした日本人ボランティアも活動しています。日本国内では、各種チャリティーイベントや勉強会を主催したり、フリーマーケットに参加して、異業種の皆さんと色々な活動をしています。最近では、カンボジアの学校に井戸を作るための寄付も始めました。SPUTNIKの活動理念は、国際交流支援に参加することによって異文化を知ってもらうことです。そうして世界に通じる心の窓を持つことが、世界平和への貢献につながります。そして、アジア各地で誰もが安心して交流できる場所を作り、多くの人々に人種や言葉の違いを超えて交流の輪を広げてもらいたいのです。

どこかで聞いたことはありませんか? 根底に流れるのはAFSの精神。今度は自分のネットワークをフル活用して活動しています。

<http://www.sputnik-j.com>
akijun@best.tbs.co.jp



SPUTNIKの校舎



SPUTNIKでの秋沢さん(中央)



学校はすべて手作りです

PROFILE

秋沢 淳子(あきさわ・じゅんこ)

聖望学園高校在学中に、YP32期生としてニュージーランドへ留学。その後、慶應義塾大学を経て1991年にTBS入社。以来、アナウンサーとして多忙な毎日を送っている。現在担当している番組は、「あさがけウォッチ!」(月～金05:00～06:00)、「ウォッチ!」(月～金06:00～08:30)、「はなまるマーケット」(木・金08:30～10:20)、「CBSドキュメント(ナレーション)」(金26:40～27:35)、「BSニュースアカデミー」/BS-i(日21:00～22:00)など。





AFS日本協会50周年

恩返しから始まったAFS日本協会

AFS1期生、渡辺 来三郎さんに聞く

日本におけるAFSの活動は今年50周年を迎え、これまでに派遣した留学生の総数が1万3千人を超えました。現在では高校生留学のパイオニアとして、年間約600人を30数か国へ派遣し、40数か国から約400人を受入れています。そんなAFS日本協会を1954年に立ち上げたのは、当時米国から帰国したばかりの高校生たちでした。その時の設立メンバーのひとりで、AFS50周年記念事業の発起人でもある渡辺 来三郎さんに、学生ボランティアの三浦 久枝さんがインタビューしました。

ないだろうか」と考え、AFS日本支部を立ち上げることを決意したという。

渡辺さんは自らAFS日本支部の代表となり、自宅を事務所として提供した。新聞社主催の東京都高校生英語弁論大会で優勝したのが縁で、その新聞社から30万円の寄付を受け、さらに1期生7人の仲間と56年秋に帰国した2期生29人で協力し、90万円の寄付を集めた。そして、9件のホストファミリーを探しだし、発足から2年後、米国から9人のサマープログラム生を受入れることができた。これが現在のAFS日本協会の始まりである。

1954年、渡辺さんを含む8人が、初の日本人AFS生として米国へ派遣された。渡航費、その他諸経費全てをAFS米国が提供したという。

「当時は、AFSは日本にまったく組織がなく、『国対国』というかたちで、文部省が試験を行っていました。受験料は無料だったし、現地でのお小遣い(年間150ドル。当時の大学卒の初任給の約7か月分に相当)以外は米国が出してくれるというので、気楽に試験を受けてみたら、あっという間に東京の代表になっていました(笑)」

と渡辺来三郎さんは当時を振り返る。東京だけで200人以上が応募し、合格したのは3人だった。狭き門をくぐり抜け、全国から選出された8人が、第1期生として米国に留学した。

8人は、氷川丸での2週間の旅を経て米国に到着した。渡辺さんの留学先は、ミシガン州ディアボーン。高校では水泳部に所属し、地域の教会のイベントにも参加するなど、積極的にAFS体験を行った渡辺さんだが、留学先で当初味わった苦労は、現在の高校生とさほど変わらなかったようである。

「いわゆる日本的な教育のおかげで、『読み書きの英語』は得意だったが、会話の

ほうは全くダメだったので、自分の英語が通じるようになるまで苦労しました」
ネイティブと同じ英語はしゃべれっこない。でも絶対に聞き返されないで通じる英語



渡辺さんの話を真剣に聞き入る学生ボランティア。11月5日、AFS事務局にて

がしゃべるようになりたい……。そう決意した渡辺さんは、パブリックスピーキングの授業を取り、発声や唇の動きの練習に励んだ。1年の終わりには、このクラスを「A」という優秀な成績で終了したという。

渡辺さんら8人の1期生は、ホストファミリーや友達に恵まれ、すばらしい1年をすごし、たくさんの思い出を胸に帰国した。日本に戻ると、当時まだ高校生だった渡辺さんたちは、「自分たちにこれだけの経験を無償でさせてくれたAFSに何か恩返しができ

あれから50年。渡辺さんは今、10月に開催される50周年記念事業の発起人として、「これからのAFS」を支えるためのネットワーク作りに奔走している。今後もAFSが質の高いプログラムを続けていくためには、1万人を超える帰国生の協力が不可欠だと渡辺さんは考えている。「過去を振り返るための50周年記念ではありません。むしろこれをキックオフとして、これからのAFSを考えるための記念事業にしたいのです。そのために、なるべく多くのリターナーに協力してほしい。」

不況や少子化、英語圏のみを希望する応募者の増加などによって、AFS日本協会は人員的にも財政的にも非常に厳しい状況に置かれている。これまでの50年の歴史を無駄にしないために、そして多くの高校生が自分たちと同じ素晴らしいAFS体験ができるように、私たちはAFSファミリーの一員として、今こそAFSに恩返しをするべきなのではないだろうか。渡辺さんのお話を聞いて、そんな思いが強くなった。

三浦 久枝(YP46期)

50周年記念事業実行委員会事務局

電話 : 03-5919-1257
 FAX : 03-5919-1258
 E-mail : 50jimu@afs.or.jp

50周年記念事業実行委員会からのお知らせ

イベント部会



大棧橋ターミナル
 ©横浜市港湾局

今秋10月10日(日)、50周年記念行事を開催します。メイン会場は横浜・大棧橋ホール。横浜港国際旅客ターミナルに隣接し、2002年12月に改装されたばかりです。隣の山下公園棧橋に係留されている氷川丸(注)でもAFS特別展示会を計画中です。記念行事は式典、AFSの未来への進水式、氷川丸見学などからなる第1部と、ピュッフスタイルのディナーパーティーからなる第2部とで構成されています。次号の本紙(5月中旬発行)で、申し込み方法も含めた詳細をお知らせいたしますので、どうぞお楽しみに!

(注) YP1期生から7期生が氷川丸で渡米(YP5期生の一部を除く)

ホームステイ部会 からのお願い



ホストファミリーを体験しませんか? 本紙116号でもご案内のとおり、今年10月に行われるAFS世界会議や、50周年記念行事参加のため来日する50余国の海外AFS代表者(理事長、ボランティアおよび事務局長。年齢22才~70才くらい)150名のホームステイ先を募集しています。昨秋パナマで行われた「AFS世界ネットワークング会議」でこの企画を発表したところ、「ぜひ、日本の家庭生活を体験したい」と大きな反響がありました。皆さまのご協力をお願いいたします。

(お問い合わせ E-mail: 50home@afs.or.jp)

下記の条件でホストファミリーを募集しています

- ①期間:2004年10月9日~2、3泊 ②地域:横浜の50周年記念イベント会場より100km圏内(ご相談下さい) ③費用:滞在中の食費等はボランティアでお願いします。

地域協働部会



ホストファミリーやホストスクールを含む各地のボランティアの方々とともに50周年を迎えた喜びを分かち合おうと、世界の各地に帰国した受入生、日本からの派遣生を受入れてくださった海外のホストファミリーに対して、この機会に日本への里帰り(ウェルカムホーム)を実現するよう呼びかけることにしました。既に呼びかけを開始している支部もありますが、さらに多くの支部がこの試みに加わり、AFS日本協会50周年を地域から大いに盛り上げたいと思います。英文案内をご希望の方は、地域協働部会までご連絡ください。

(お問い合わせ E-mail: 50welcome@afs.or.jp)

広報部会



今では高校留学はかつてのように珍しいものではなく、メディアも大きくは取り上げません。そうはいっても50年の歴史を持ち、さらにその40年前から相互理解や世界平和とは程遠い状況のなかで活動していたAFSは、非常にユニークな高校生留学団体です。50周年を機会に、このユニークさ、歴史の長さ、活動の素晴らしさ、日本はおろか世界中で排出した素晴らしい人材などを題材に、AFSの認知度を上げる活動を計画中です。ライターや関係者の皆さまのご協力を、ぜひともお願いいたします。

募金部会



50周年記念行事のための寄付(①)と、2005年以降の奨学制度のための継続的寄付(②)の二本立てで、まずはライターを中心とした募金活動を開始しています。各期毎に何名かの方に幹事をお引き受けいただき、同期の方々にメール、電話などで呼びかけていただいています。目標金額は①が2000万円、②が3000万円ですが、11月末現在の状況は、①が430万円、②が37万円となっています。今後も広くAFSファミリーの皆さまの一層のご支援をお願いいたします。趣旨に賛同してご寄付をいただける方は、当委員会事務局までご連絡ください。

対談：お母さんボランティアの現状と今後

AFS日本協会は、ここ10数年で交流国やプログラムが多様化し、事務処理が大変複雑になりましたが、そのなかで、事務局の作業を熱心に支えてくださっているボランティア集団があります。通称「お母さんボランティア」です。11月5日、AFS事務局で、お母さんボランティアの代表(岡本 美代子さん、柴田 新子さん、太田 敦子さん、橋田 明子さん)と大山 守雄事務局長が対談しました。

大山(事務局長) 今日皆さんの日頃の活動の様子や課題などをお聞かせください。「お母さんボランティア」以外にかかわっているAFSの活動はありますか。

橋田(YP39期ドイツ帰国生保護者) ホストファミリー、LPなども体験しましたが、一番長く続いているのが「お母さんボランティア」です。

太田(YP39期ニュージーランド帰国生保護者) 短期間のホストファミリー、面接員などの他に、最近特にやりがいを感じたのは、留学説明会で保護者としての体験をお話しできたことです。

岡本(YP38期アメリカ帰国生保護者) これまでに保護者会や面接員など、母親としての意見が求められる場面にかかわってきました。

柴田(YP38期ベネズエラ帰国生保護者) 短期プログラムのホストファミリー、LPの他に、神奈川支部で受入生に日本語を教えたり、AFS友の会にかかわったり、「お母さんボランティア」を始めたことがきっかけで、これらの活動に参加するようになりました。

大山 皆さん、様々な場面でご活躍されていますが、他の活動と比べて、「お母さんボランティア」のやりがいはどうですか。

太田 事務作業は単調ですが、作業を終えて職員の皆さんから感謝されると嬉しいです、何よりもここでの人々との出会いが楽しいです。

橋田 LPなどのように継続性のあるものではないですから、いつでもかかわることができます。それぞれの家庭の事情を優先しながら、空いた時間がかかわることができるボランティア活動があるのは嬉しいです。大半が派遣生保護者ですので、作業をしながら共通の話題で盛り上がるのもまた、楽しみのひとつです。

岡本 話題も子供の成長とともに留学、進学、就職などの問題から、最近では介護の問題にまで変化してきました。

柴田 AFSのなかでは「ここが私の居場所」という感じがしますね。ここが全ての出発地点であり、ここがあるからこそ他のAFS活動にも出て行けるといふか…。

大山 皆さん、「お母さんボランティア」が心の支えという感じですね。今はこの組織は東京の事務局にしかありませんが、他の事務所でも派遣生保護者の方々に同様の呼びかけをすれば集まる可能性があるということで、これは今後検討する余地がありそうです。「お父さんボランティア」も活躍できるといいですね。

岡本 ご主人が定年を迎える方も増えていきますので、今後十分期待できると思います。

大山 AFS活動は、もともとボランティアが始めた活動です。規模の拡大に伴って有給職員が増えましたが、そのために、かえってボランティアの活動範囲を狭めることになっていないか心配です。「お母さんボランティア」も、事務作業にこだわらずにどんどんやれる仕事を見つけてほしいと思っています。

ところで、「これならこのグループでできる」と思うことはないですか。

太田 ホストファミリーやLPをサポートする仕事はどうでしょう。例えば、長い夏休みの過ごし方に苦労していらっしゃるホストファミリーを助けて、留学生に着付けを教えたり、美術館などへ連れて行ったり…。

大山 それもいい。希望する留学生たちには、夏の少しの間だけでも東京を見せてあげられるとよいですね。

柴田 AFSでは様々なボランティア活動の形があると思うので、それらをきちんと分類して登録制にすれば、もっとやりたいことが明確になるのでは？

太田 応募書類の整理などをお手伝いしていると、改善したいと思うことがいろいろあるのですが、それを吸収し反映できるシステムがあるといいですね。

岡本 きちんとトレーニングを受ければ、私たちができる仕事の幅も増えると思います。もっとスキルアップの機会を増やしてほしいです。

大山 いっぱい課題ができましたね。事務局でも今後、「お母さんボランティア」のお仕事の幅が広

がるように、いろいろ工夫していきたいと思います。今日は参考になるご意見をありがとうございました。



写真左より岡本さん、柴田さん、大山局長、橋田さん、太田さん

ボランティア・エクスチェンジ報告(タイ 日本)

点、線から面の交流へ

10月11～24日、AFSタイのボランティア5名が来日し、日本を縦断しながら各地の支部などを視察し、AFSボランティアとの親睦を深めました。

AFS日本協会とAFSタイとのボランティア交流は、10年近く続いています。AFSに関わるボランティアの相互理解を促進する目的で、毎年約2週間の派遣と受入を交互に実施しています。今回来日した5人は、チェンマイ、バンコック、ナン(タイ北部ラオスとの国境付近)の各支部で活発に活動しているボランティアで、全員がタイの高校または大学の教員です。学期の合間の短い休みを利用しての参加でした。

タイから来日したボランティアたちは、「日本人の気配り、心の温かさを肌で感じた。貴重な体験だった。次回はぜひ、みなさんとタイでお会いしたい」と話していました。

今年2月にボランティア・エクスチェンジでタイに行った小西 滝人さん(松江支部)は、今回は受入れの立場を経験し、感想を次のように語りました。

「2月にタイへ行ったメンバーが所属する各支部で、受入れのリーダーができたことはとてもよかったと思う。これまで点と線だった交流が、さらに面的な広がりを持つようになったと実感できた。貴重な体験を将来の活動の糧にしたい」

*今回タイのボランティアが訪問したのは、東京、豊田、松江、大分などの各支部。本紙115号には、小西さんのタイでの体験報告が掲載されています。



▲東京での歓迎レセプションでAFS日本協会のTシャツをプレゼントされて(10月15日、AFS事務局にて)



◀茶道を体験した5人(10月19日、松江の月照寺にて)

anniversary

神奈川支部10周年!

神奈川支部は、同支部の10周年を記念して、今春来日する受入生に奨学金を提供することを決めました。また、昨年11月8日に開かれた記念パーティーには、これまで神奈川支部にかかわったホストファミリー、日本勤務・里帰り中の受入生、帰国生、支部ボランティアなど、総勢100名近くが集まりました。



財務委員会より

今年度の財務委員会活動について

財務委員会委員長 井手 秀彦(YP11期)



厳しい財務運営

財務委員会の活動方針は、基本的には昨年度と大きく変わりません。ただ、今年度は新たに構造改革の一環として月ごとの収支実績管理と、特別事業の50周年記念事業との協働に取り組んでおります。定例の収支実績管理を行うなかで直近の実態がある程度分るようになり、課題についての認識が深まりました。経費支出は事務所移転による経費の圧縮効果があり、予算対比でほぼ順当な推移をしています。しかし、収入は予算と比べて大きく減っており、年度末にはなお赤字が見込まれる厳しい状況にあります。これから寄付を中心とした収入増加と経費の圧縮が依然として重要課題であることは変わりません。

募金活動強化の必要性

本年度も残り少なくなってきましたが、事務局ならびに支部での募金活動の取組みを一層強化したいと思えます。50周年記念事業としての寄付はこれまでの50期にわたる帰国生を中心に募金しますが、財務委員会では一般法人や帰国生を含む個人を対象にした一般寄付の募金活動を推進します。事務局では寄付の種類や趣旨を説明する資料を用意していますので、支部での募金活動にぜひご活用ください。これまですでにご寄付をお寄せ頂いている皆さまには、この場をお借りして厚くお礼申し上げますとともに、今後さらなるお願いにあがりました際には、ぜひとも引き続きご支援のほど、よろしく申し上げます。

“青眼”

フランスに時帰国したあと再び日本に戻ると、なぜかいつもノスタルジックな気分になる。浪漫派の芸術家たちの郷愁もこの種のものかと、自分を慰めるしかない！ふたつの国、ふたつの文化を持ちながら生きていくのは、たまに頭や心の整理整頓がたいへんなのだ。

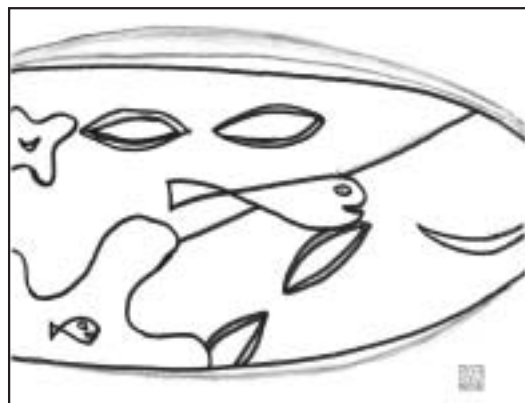
パリイから富士まで機窓に春の星

自宅に着くと、留守番電話は「メモリー・オーバー」になっていたり、無数の電子メールが西鶴の矢数俳諧より難解だったり、デスクに原稿依頼が山積みになっていたりして、たまっている新聞には暗いコースばかり…。

同じ柵に「وران・聖書去年今年

しかし、よくみると、17年前の日本のホストファミリーから小さなアルバムが届いていた！「あなたの日本の弟は、もうお父さんになりましたよ…可愛い女の子でしよう！」と。写真の裏の、日本のお母さんの懐かしい筆跡を覗くと、手は震えた。

「あの子の目は、青がかかったように、シンデレラのような、ヨーロッパの小姐のような目をしてしまっ…あなたにそっくりです」と。



大巨や幼子の眼の空いろ

漢語に「青眼」という美しい比喻表現がある。広辞苑に、「自分の好む人をよろこび迎える心があらわれた目つき」という定義が出ている。きつと姪は家族全員に「青眼」で暖かく見守られているだろう。そして僕、青い目をしたフランスの伯父も、彼女を家族とみているのだ。僕の心の中では、17オの時はじまった日本留学はまだ続いているのだ。いつかは日本の姪とフランスへ遊びに行きたいな…。

PROFILE

マブソン・ローラン 長野県在住。1986 87年、AFS生としてフランスから栃木県立宇都宮高校に留学。パリ大学大学院東洋学部日本文学博士課程修了。早稲田大学大学院教育学研究科博士課程(俳文学・比較文学専攻)修了。平成12年度NHK俳句王国大賞受賞。国際俳句交流協会翻訳委員・国際委員、ほか。



宝飾職人への道

2

原田 隆雄

職人のこだわり、お客様のこだわり

ジュエリーの製作には、おおざっぱに2通りの方法があります。

- (1) ワックスを削って型に取り、地金を流し込んで作る方法
(型さえあれば同じ物を大量生産が可能)
- (2) 地金を直接加工して製作する方法
(同じ物を作っても完璧に同じ物は2つと作れない)

私は(2)の方法を選び、製作しています。大量生産はできませんが、作品の一つずつ心を込めて製作できると信じているからです。「手で作る」といふことが、私自身の強いこだわりであり、この技術を少しでも向上したいと思っています。

私の最近の仕事は、ブライダルリングとハイジュエリーの1点製作が中心です。どちらも既製品に飽き足りない、何か特別な物をお客様からの注文です。

「2人とも海が好きなので、海にちなんだマリッジリングがほしい」
「少し日本的なデザインを入れながら、でもヨーロッパのブランドの

ドレスと合わせてもおかしくない、自分らしいデザインを考えてほしい」お客様にもそれぞれのこだわりがあるのです。それらを一つひとつ伺い、デザインを考えて製作していくのですが、でき上がった時にお客様が喜んでくれると、「この仕事を選んで本当に良かった」と思うのです。大変な分、やりがいも大きい仕事です。

PROFILE

原田隆雄 1971年東京生まれ。都立西高校時代にAFS35期生として米国ウィスコンシン州に留学。91年、日本ジュエリーアカデミー入学。92年、イタリア・フィレンツェに半年間滞在。現在は、オーダーメイドジュエリーのデザイン・制作を行う。



原田さんこだわりの作品

AFS友の会 かわら版

「AFS友の会」事務局 〒151-0051東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-16 2F 財団法人エイ・エフ・エス日本協会内
FAX: 03-3357-3841 E-mail: tomo@afs.or.jp

このかわら版に、AFSにまつわる思い出や出会い、再会の感動、リユニオンのお知らせなどをお送りください。
次回の締切は3月上旬です。紙面の都合で頂いた原稿をすべて掲載できない場合もありますので、予めご了承願います。

「AFS友の会」設立5周年に寄せて

友の会会長 藤野 隆弘 (YP 3期)



AFSの日本における活動50周年の今年、「AFS友の会」も設立5周年を迎えます。

「AFS友の会」は、AFS活動にいかなる形であれ参加した経験を持つ人たちが、相互の親睦を深めるとともに、様々な活動やイベントを通じてAFS活動の継続・発展のために協力し、AFS活動を側

面から支援することを目的として設立されました。

この5年を振り返ってみますと、設立総会への出席者400名を礎として、会員リストには700名を超える方たちのメールアドレスが登録され、イベントとしては毎年恒例の新年会、会員やその友人をゲストスピーカーにお招きして隔月開催される「ネットワーキングの集い」、ランチタイムの懇談の場としての「ビジネスフォーラム」、夏休みに留学生・ホストファミリーが参加し、家族連れで東京の下町を都電で探索する「アド街っくオリエンテリング」(好評を得て、今年は江ノ電で鎌倉・江ノ島をまわる企画に発展しました)などが実施されました。

参加者数の増加とともに参加者の層も広がり、異なるAFS体験を持つ方たちが共に活動を楽しんでいるのは、とても嬉しいことです。しかし、その活動はいまだに東京近辺に限られていて、設立当初に計画していた全国的な広がりは実現していません。また、さらに多くの人たちに参加してもらえ魅力的なイベントの企画と実行が必要で、これまで以上に多くの方たちのアイデアとご協力をいただきたいと願っています。

AFS50周年の事業は、「AFS友の会」の目指すところを実現するものでもあり、50周年の各イベントには「AFS友の会」の活動に中心的な役割を果たしてくれている人たちが、積極的に参画しています。これを機に、「AFS友の会」も次の5年の発展に向けて、しっかりと足固めをしたいと期待しています。

新年会のお知らせ

AFS日本協会50周年とAFS友の会5周年を記念して、恒例の新年会を開催します。

日時：2004年1月24日(土)12時～14時(今年は昼に設定しました)

場所：如水会館2F スターホール

(東京都千代田区一ツ橋2-1-1 Tel:03-3261-1101)

会費：社会人4,000円、学生3,000円

パーティー：ピュッフェスタイル、ソフトドリンク付(ビール、ワインは会場にて希望者に販売)

アトラクション：1) 山下美知子さん(YP12期、東京外語大講師、フィリピン語の第一人者)のお話と学生たちによるフィリピンダンス

2) お楽しみ抽選会(ご家庭に眠っている品物などがありましたらお持ちください。売り上げは50周年記念事業に寄付いたします)

同期会・同窓会開催情報

* 以下は、昨年夏以降に50周年期幹事が中心となって企画している同期会・同窓会の情報です。

YP1期	2003年7月に開催しました。
YP6期	2003年11月1日に開催しました。
YP8期	2004年10月10日に開催します。詳細別途連絡。幹事 鍵溝 清・高石 恵子・瓜田 洋治
YP9期	2003年7月19～20日に伊豆で、11月1日には関西リユニオンを開催しました。
YP11期	2003年7月に開催しました。
YP14期	2004年10月10日、50周年記念式典後の午後3時から、横浜中華街で開催します(会費は8,000円前後、場所未定)。参加できそうな方は、浜田 陽子まで。yokoytr@yd5.so-net.ne.jp
YP19期	2003年12月6日、30周年同期会を開催しました。2004年10月にもAFS日本協会50周年を記念して開催する予定です。
YP21期	2003年7月12日に開催しました。
YP25期	2003年7月19日、代官山のオシャレなお店で開催しました。国内はもとより遠くはスイス・ベトナムから総勢31名が出席。予想以上に盛り上がり、最後はAFSソングを大合唱。
YP28期	2004年3月13日、「28期および同期ボランティアALLの初めての同窓会」を予定しています。メーリングリスト登録受付中。YP28@afs.or.jpまでご連絡を。幹事 登坂 恵・河野 淳子
YP30期	2004年1月24日の夜、AFS友の会新年会の後に開催します！連絡先：木納 律子 rikonk@minuet.plala.or.jp
YP32期	日程調整中。気になる方は大野までお問い合わせを！ h-ohno@afs.or.jp

上記以外の情報も随時ホームページなどで紹介いたします。

帰国生が自らのAFS体験を映画に！

1997年に米国から小松支部に留学し、帰国後に女優、モデルとして活躍しているジェニファー・ホームズさんが、自らのAFS体験を基に映画をつくりました。タイトルは“JENIFA”。ジェニファーさん自身も主演女優として登場します。公開は春以降の予定。映画について詳しく知りたい方はこちらをご覧ください。

<http://www.lux.co.jp/dct/movie/index.html>



映画の撮影を無事終了したことを大山事務局長(右)に報告したジェニファーさん(左)。昨年10月、AFS事務局にて

ジェニファーさんからのメッセージ

Dear AFS NEWS Readers,
I was an AFS exchange student in 1997, at Komatsu, Ishikawa. That year in Japan was one of the best years of my life. I learnt about being me in the world and took that experience with me to create a journey of life embracing to whole world. I recently made a movie based loosely on that experience. It is called, "JENIFA" and will be out in theatres. Please take a look!
Love, Jennifer Holmes

(以下和訳)

AFS NEWS読者のみなさまへ
私は1997年にAFS生として石川県小松市に滞在しました。私の人生の中で最高の1年でした。「地球市民としての私」を見つめるようになり、世界とのつながりを意識しながら自分の生き方を考えるようになったのです。このAFS体験を基に映画を撮りました。
“JENIFA”という題で近日上映される予定です。どうぞご覧ください！

ジェニファー・ホームズより

元小松支部長の伊勢 利子さんより

『日本というと東京の風景しか想像できなかった一人の少女が太平洋を渡り小松にやってきました。だれよりも好奇心が強く、まわりの人をいつも楽しませる魅力をもったジェニファー。彼女の感じた日本の良さやさまざまな体験を世界中の人に伝えたいという強い情熱が、いろいろな困難を乗り越え“JENIFA”という映画に生まれ変わりました。上映が待ち遠しいです。』

事務局より

> 2004年度短期プログラム募集のお知らせ

ホストファミリーの募集

募集期間：2004年1月～4月下旬
受入期間：2004年6月下旬から8月中旬までの約7週間
留学生の出身国：アメリカ合衆国・イタリア・香港
内容：留学生は、ホームステイをしながら、東京・名古屋・大阪・福岡などの語学学校へ通学します。留学生の1ヶ月分の通学交通費をご負担いただけます。受入可能地域が限定されますので、下記の各事務所までお問い合わせください。

派遣生の募集

募集期間：2004年1月中旬～(定員に達し次第締め切り)
派遣期間：2004年7月下旬から8月下旬までの約4週間
派遣先：オーストラリア・ニュージーランド・カナダ・タイ
対象：高校生(タイは20歳以下の大学生可)
内容：ホームステイ+語学研修(タイは高校通学)
費用：385,000円～575,000円(昨年実績)
考：学校推薦・支部推薦(先着順)

お問合せ、資料請求先

東日本事務所

〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-16 2F
TEL 03-3357-5835
FAX 03-5251-0177
E-mail info-east@afs.or.jp

名古屋事務所

〒468-0051
愛知県名古屋市中区植田1-2116
TEL 052-807-7338
FAX 052-807-7349
E-mail info-nagoya@afs.or.jp

大阪事務所

〒564-0027
大阪府吹田市朝日町3-405
TEL 06-6317-3955
FAX 06-6317-3977
E-mail info-osaka@afs.or.jp

福岡事務所

〒814-0006
福岡県福岡市早良区百道2-7-30
TEL 092-821-2005
FAX 092-821-2012
E-mail info-fukuoka@afs.or.jp

> 地域事務所より

支部員を募集します

広島、奈良、大阪、埼玉の各支部は、現在支部活動を担ってくださる方を募集しています。お問い合わせは、各支部を管轄する事務所(左下)まで。

> 総務より

住所などの変更は必ずご連絡ください

同封の「会員連絡用ファックスシート」をご利用いただくか、以下へ必ずご連絡ください。海外へ引越された方は、日本国内の住所をAFS NEWSの送付先としてお知らせください。
事務局総務(TEL 03 3357 5831 FAX 3357-5841 E-mail meibo@afs.or.jp)

> 経理より

寄付金、会費の振込用紙を同封しています

維持会員の方々には寄付または会費の振込用紙を同封しています。会費未納の方々はお早めにお振込みをお願いします。なお、この案内が皆様からの寄付や会費のご入金と行き違いになりました場合はご容赦ください。
事務局経理(TEL 03-5251-0171)

寄付金領収書の発行について(お願い)

当協会の「特定公益増進法人であることの証明書」の有効期限が2004年3月15日となっているため、3月16日以降のご入金に対しては文部科学省の認可時期との関係で、直ちに領収書を発行できない可能性があります。予めご了承ください。

3月決算で税務申告を予定されている法人名義のご寄付は3月15日までに
お振込みをお願いいたします。

自動引落しの登録をされている方へ

次回引落日をお知らせいたします。事務局経理(TEL 03-3357-5832)

YOSHI基金	2月5日(木)
一般寄付	
AFS日本協会奨学金	2月26日(木)
年会費	4月26日(月)

編集後記

AFS NEWSの編集を担当するようになって4回目の冬を迎えた。取材をお引き受けくださった方や寄稿してくださった方、そして読者の皆さまより数多くの励みやアドバイスをいただいた。この場を借りてお礼を申し上げたい。50周年を迎えた今年、気持ちをあらたに紙面デザインを一新した。より多くの方に親しんでいただける、読みやすい会報誌をめざしていきたい。投稿、お待ちしています!

(河野/j-kawano@afs.or.jp)